エドウィン・ミュア著『自叙伝』（ 5 ）

横山　竹己訳*

An Autobiography by Edwin Muir

Takemi YOKOYAMA*

これらの歳月を大急ぎで通過したが、いまもってこれらの歳月が苦しみに満ちた歳月であり、心の中にいまだにかすんでみえるからである。こんなにも多くの死を受けとめるには私はあまりにも若すぎた。これらの歳月は喪失以外に何の報いも与えてくれなかったように思われた。それは、真ん中に四人の死体が何の理由もなく散らばっている惨めなガラクタのひと塊のようだった。私は沼地から這い上がろうとしている人のように、これらの歳月から抜け出したが、そのガラクタはその後長い間執拗に私の手かせ足かせとなった。連続的な死に直面して私はただ茫然とするばかりであった。そして、寡黙になり、放心状態に陥り、惨めであった。心は落ち着きを取り戻していたが、私の健康は再び脆くも崩れていった。ジョニーが病気している間､私も胃の神経病にかかっていた。絶えずかすかな吐き気やめまいに苦しめられたが、それらは汚れた薄膜のように広がり、すべてのものに――仕事や散歩や読書――に波及していった。夕方仕事が終わってから、あちこちの医者に診てもらったが、何の結果も出ず、ただ十四シリングの中から多くの半クラウン（二・五シリング）を無駄使いするだけだった。ついにオフィスの一人の事務員が街の南側のスラム街の医者のところに行ってみたらと言ってくれた。彼が言うには、この医者は､第一級の人物なのだが､唯一の不評は、自由思想家（歴史的には名誉革命直後から十八世紀前半にかけてあらわれた英国の理神論者、この影響を受けたフランスやドイツの理神論者およびそれに近い思想家に対して用いられるが、一般的には、宗教に関する諸問題を合理的に考え、教会の権威を無視する思想家をさす＝訳者註）で名高いということであった。初夏のある夕刻、彼の診察室を訪ねた。彼は体は小さいが、こぎれいでとても立派な服を着ていた。髪は白髪になりかけており、口髭は茶色であった。彼は最高の礼儀をもって接してくれた。そしてこれまでどの医者もやらなかったことをやってくれた。彼は私を徹底的に検査し、数週間にわたって私を診てくれた。この間、費用はいくらかと聞くと、いつも何か言い訳するのであった。ついに彼は胃洗浄器を処方してくれた。毎晩、すごく長いゴムのチューブを飲み込み、胃の中に残っているものをすべて取り出さなければならなかった。これはとても嫌だったが、医者に励まされて、続けた。私は自分の病状に関心をもち始め、医者と知的な共同作業をしているように感じた。これを数か月続けた。医者はこの間ずっと私を診てくれた。ついに彼は進展が出始めたのを見て取り、私も気分がよくなり始めた。診察の間、我々は共謀者のように話をしたが、長くはできなかった。彼がとても忙しかったからだ。私が退室するとき、彼は大抵、彼がとても称賛していた人気者の哲学者ミスター・ドゥーリー（Mr Dooley とは米国のジャーナリストでユーモア作家 F. P. ダン（Dunne）一八六七―一九三六が創作した架空の人物で、シカゴの酒場の店主で、かつ哲学博士を自認している。ダンには *Mr Dooley in Peace and in War* や *Mr Dooley Says* など、いわゆるミスター・ドゥーリーものの著作がある＝訳者註）の剽軽な言葉を言ってくれた。彼の患者のほとんどはとても貧しい人たちだったので、彼は診察料を決して請求しなかったと思う。彼はまったくの善意からスラム街で働いていたが、礼儀を欠くようなことは決してなかったし、またウエストエンドの上流階級の人たちがかかる開業医が金持ちの患者を扱うように、私を扱ってくれた。そして最後に、これ以上は断固として受け取らないと言いながら、愚かしいほどわずかな診察料しか請求しなかった。彼に対する愛情と称賛の念から、私は彼にずっと診てもらいたいと思ったが、私の病気が治ったとき、彼はお大事にと言いながら、また二度とあなたを診ることがないようにと言いながら、さよならとしっかりと言った。私は彼が助けた多くの人たちの一人に過ぎないことを知っていたし、さらに彼の善行が戻ってきて、彼を困惑させ、彼の時間を浪費させるのを彼が望んでいないことも知っていた。彼は優れた医者であったが、愉快な人でもあった。

2016 年 10 月 18 日受理
* 東北工業大学名誉教授

そして自由思想家であるにもかかわらず、私の知っている他のだれよりもキリスト教の聖人のような人であった。

私は順調に成長したので、グラスゴーでの最初の五年間の惨めな生活は私から次第に遠ざかっていった。私は十九歳で、健康であり、週に十六シリング稼いでいた。仕事が終わった後の夕刻の時間は――六時に仕事は終わった――私が求めていたすべてであり、自由に好きなことができる時間であった。オフィスは楽しい場所であった。かつては優れた運動選手で、口うるさい直情的な事務主任のボブ・M氏は我々に悪態をついたが、そこには何かしら兄弟のような親しみが感じられた。そして恥も外聞もなく戦闘的な大きな叫び声をあげて、オフィスのフットボールの試合に参加していた。我々は、ボブ、もう一人の事務員、私、それに雑用係の四人だけだった。会社には四輪の荷馬車が何台かあった。その馬車はグラスゴーの居酒屋と周辺の片田舎を巡回していた。馬車の御者はたいてい小作人で、お金を多く稼ぐためにグラスゴーに来たのである。毎夜、巡回から帰ってくる頃には、御者たちは千鳥足で歩いていた。居酒屋の主人と飲み交わすことはいいビジネスであった。御者のうち長い間この会社にいたのは一人か二人だったが、それでも彼らはほとんど見向きもされず、日々の勘定を清算するのに交渉に勝たなければならなかった。彼らをだましたりはしないが、さりとて彼らが憎み、心底疑っていた厳格な簿記の原則を外すつもりはないことを彼らに納得させねばならなかった。彼らの一人ひとりには手子がいた。これらの手子たちはほとんどがスラム街出身で、非情で、ぼろをまとった、獰猛な顔つきの一群であった。特に一人の背の低い、ずんぐりした手子がいたが、彼はあまりにも大きすぎるスーツを着ていた。ジャケットはひざまでとどき、ズボンは両脚の回りで大きな円形のしわをつくり、突き出ていた。彼がにやりと笑うとほんとうに怖かった。上顎に二本、下顎に一本と、三本の歯しかなかったからだ。しかし、まもなく彼が害を及ぼすような少年でないことを知った。私は日々スラム街の少年たちと接するようになってから、毎日通っていたスラム街を怖いとは思わなくなった。スラム街を慣れ親しんでいるという感覚で歩いた。会社はパブだけでなくクラブも供給していた。これらはほとんど居酒屋であったが、中にはほんとうに質の悪い連中が足繁く通ってくる居酒屋もいくつかあった。その居酒屋の一つの支配人であるジョージは度々オフィスにやって来た。彼は髭を蓄えた、髪が赤褐色で、しわがれた声の持ち主だったが、かつては服役したこともあり、いつもリボルバーを持ち歩いていた。彼はとても物静かな男で、チャーリー・ピース（C. Peace 一八三二―七九、英国の名うての強盗殺人者。アームリー刑務所で絞首刑に処された＝訳者註）をとても称賛していた。

時々，ジョージを見ると、印刷会社で働いていたときに起こったぞっとする出来事を思い出すことがあった。ある日、乳製品の売店でスナックを食べながらテーブルに座っていると、チェックのスーツを着た馬面で怖い顔つきの男が私の座っていたテーブルに座った。そこにはその男と私の他に誰もいなかった。彼はしばらく自分の目の前をじっと見つめていたが、それから自分に言い聞かせるように、「ああ、もうこれでお仕舞いだ」と言った。私はその言葉に関心を示さずに顔を上げた。すると、彼は私の無関心に憤慨したかのように、「君は何も知らんのか。向こうのデューク街のことを」と言い、肩の上で親指を左右にぐいっと動かした。そして、「今朝、男が絞首刑にされたんだ。可愛そうなボブ。いい奴だったのに。当局が奴を捕まえたのよ」と言い続けた。彼が本当のことを言っているのか、私を脅かすつもりで言っているのかわからなかったが、今では彼が実際になされた処刑のことを話していたのであり、また自分自身のことが心配になり、悲しみにくれて憤慨していたのだと確信している。

このオフィスで働いていた間に、他に二つの記憶が時々蘇ってきたが、今ではジョージとも馬車の手子たちとも親しくなったので、彼らが怖いという気持ちは薄れていった。一つの記憶は、夏の夕刻の記憶である。ソルトマーケット通りを歩いていると、袋小路の行き止まりで人だかりに遭遇した。筋骨たくましい、赤毛の女性が両腕を肩までまくりあげ、小さくてしりごみしている男の顔を乱打し、「若い娘のときにあらぬ道に誘い込んだのはこいつなんだ。畜生！私を夜の女にしたのもこいつなんだ。畜生！こいつがいなかったら、まともな女になっていたんだ。畜生！」と大きな声でわめいていた。その男は顔を両手で覆って、壁に寄りすがってうずくまっていた。彼が両手で顔を覆っていたのは、自分の身を守るためではなく、ただ恥ずかしかったからに過ぎなかった。こうすれば、この女性をたらし込み、長い間行方をくらましていた自分の顔がだれにも見られなくてすむからだ。彼は哀れでみすぼらしく、年老いているように見えた。私は彼を気の毒に思ったし、その女性が言っていることを信じなかった。彼は女性をたらし込むような男には見えなかったのだ。結末はどうなったかわからないが、体の大きな赤毛の女性がその男の顔を殴ったげんこつのゴツンという音を聞いて気分が悪くなった。取り巻き連中は干渉せずにただ見ているだけであった。

もう一つの記憶は、どんよりした冬の土曜日の

午後のクラウン街というもう一つのスラム街の記憶である。私はある医者のところに通っていたが、また人だかりに出会った。二人の若い青年が中央に立っていた。まじめで、どこから見てもきちんとしていて、特に怒っているようにも見えなかった一方の男が時々、ゆっくりとこぶしをあげ、まるで機械的にもう一方の男を殴った。もう一方の男は黙って立っていて、自分の身を守ろうとしなかった。ついに、一人の老人が、「どうして君はこいつをそっとして置かないのか。こいつは君を殴ったりしないじゃないか」と言った。そのまじめな青年は「自分を殴ったりしないことを知っているが、自分は彼を殴るのだ」と答えた。そして、彼の方をじっと見て、再びこぶしを振りあげた。私はこれ以上見たくないと思ったが、その光景と特にまじめな青年の言葉は——殴られている方の男は何も言わなかった——まるで知らないうちに私を悩ましていた問いに対する答えでもあるかのように、私の心から離れなかった。それは、おそらく一発の反撃も返さずに哀れにも打たれ放しであったジョニーの徐々に迫ってくる、痛ましい死に対する答えでもあった。この二つの記憶にはスコットランドのカルヴァン主義の特質があった。あのまじめな青年の応答の背後には、予定説という反駁できない恣意的な論理があったし、また赤毛の女性とこの女性をたらし込んだ男の出会い（二人とも、彼らの原罪がどこか別世界で犯されたのかもしれないと思われるほど変わっていたが、それでも同じスラム街でまだ生き続けていた）は、カルヴァンが理解した運命の下劣なイメージであった。これら二つの出来事のこれみよがしの邪悪な行為の背後にあったのは、何とも侘びしくなるような類の徳、即ち、論理と現実の認識であった。

この時期の夢はたったの二つであった。最初の夢は、漠然とではあるが、ジョニーの病気を思い出させるもので、二人の青年同士の一方的な戦いの夢である。この夢の中で強靱な大男としわくちゃの小男がボクシングのリングの中で戦っていた。大男はこぶしを振り上げ、いとも簡単に小男をノックダウンさせてしまった。だが、小男は起き上がり、再び戦い始めた。こういうことが何ラウンドも続いた。大男は次第にあせり始め、ノックアウトの一撃を繰り出そうと戦ったが、小男は、かなり打たれていたにもかかわらず、起き上がり続けた。何も小男を止めることはできなかった。そしてついに小男の小さなこぶしは、紙や蛾と同じくらい軽いのだが、大男の顔の好きなところを軽く叩いた。それでも大男は小男のこぶしを、まるでブンブン飛んでくる蝿のように、疲れた腕をふるって払いのけることができた。しかし、たちまち小男のこぶしは再び体勢を整え、大男の顔をパタパタと軽く叩き、彼をビシッと叩き、そして拷問にかけるようにひどく苦しめた。ついに大男は完全に打ち負かされて、リングの中で大の字になって倒れた。目からは涙がにじみ出ていた。そして、小男は大男に対して好き放題のことをした。それは恐ろしく忌まわしい夢で、名づけようもないもののイメージであった。

もう一つの夢は奇妙で美しい夢であった。その夢は表面的には私の姉の一人に係わるものだったが、実際には母親の死にさかのぼるものだった。この夢は何かの代用であった。私はグラスゴーの下宿で椅子に座っていると、一番上の兄が喪服を着て戸口に現れた。中に入らないで、秘密をもらすかのように、注意深い声で「いっしょに来い。彼女が死んだ」と言った。私は悲しむというより驚いて立ち上がり、兄の後について行った。私の知らない家に到着し、その大きくて天井の高い部屋に入った。すべすべした床が眼前に広がり、すべてが床から天井まで伸びている二つの高い、カーテンのない窓から入る光で輝いていた。部屋の真ん中にベビーベッドのように小さなベッドがぽつんとあった。そしてそのベッドの周りには喪服を着た人たちが数人立っていた。ベッドかベビーベッドの上には白衣を身につけた若い女性が死んで横たわっていた。会葬者たちは、私が戸口に現れるとうやうやしく見上げ、私がベッドの側に近づけるように、少し後ずさりした。しかし——これはすべて私の意志とは関係なく自然に起こったように思えた——私はベッドの側ではなく、戸口の近くにあったマントルピースの方まで行き、それに片肘をついて、お辞儀をした。背中を半分他の人たちの方に向けながら立って、私は泣き始めた。涙が顔を伝って流れた。長い間涙は流れ続けていたが、止めようとはしなかった。ついに涙は自然に止まった。そして、その時が来たかのように、押し黙る会葬者たちの中を通ってベッドに近づいて行った。椅子に座りながら、死んだ姉の一人をじっとみた。彼女は真っ青だった。鼻や顎のしわは一吹きすれば消えてなくなるかもしれないほど脆くなっているようにみえた。目は閉じていた。よく見ると、ほのかな赤らみが彼女の頬を染めているのをみたと思った。そしてその赤らみは濃くなり、たちまち彼女は火に包まれて燃えていた。その赤らみは彼女の内部から出ているように思えたが、それは私自身の胸部の中の暖かくて澄んだ治癒の部位から出ていることを知った。彼女の目はぴくぴくと動き、開いた。そして手を差し出した。私は会葬者たちに向かって、「ごらん、私は彼女を生き返らせた」と叫んだ。が、この言葉を発した途端、恐怖が私を襲った。そしてその言葉をかき消すように、あるいは破棄するように、

「ごらん、神が彼女を生き返らせた！」と急いで言い直した。

この夢を母親が死んでから十七年後にドイツでみた。このとき、かつては耐えられなかった母親の記憶が再び蘇り、母親は実際に私の心の中で生き返ったのである。夢の中で、母親が死んだときに流せなかった涙を母親のために流した。母親が死んだときは、人生は鉄の法則によって支配されているように思えたし、これに対する唯一の返答は茫然とした冷静さであった。ドイツでは十四歳で働き始めてからはじめて知った余暇と自由の最初の数か月を楽しんだ。はじめて私は自分の人生を振り返り、そして自分がこれまでやみくもに生きてきた人生を意識的に追体験し、そうすれば自分自身をいくらかでも救い出せるのではないかと望みつつ、自分の人生をわかりやすく描いてみようと思った。数か月前から私はロンドンで精神分析の治療を受けていたが、この精神分析によってこれまで隠しておいた過去を相当吐き出した。このときはもうすでに一人の友人の影響下にあった。彼はすばらしい人物で、私の詩に対する愛を再燃させ、また霊魂不滅に対する信仰を取り戻してくれた。おろらく、こうしたことがすべて夢に影響したのであろう。

しかし、グラスゴーでの最初の五年間の私の人生には自分の力ではどうすることもできない大きな領域があり、それはまるで心に重くのしかかる不動のゴミの山のようなものであった。二番目の兄ウィリーとの休日、それに三番目の兄ジョニーの長期にわたる苦悶、この二つはこのゴミの山では際立っていたが、それ以外は薄汚れた荒廃であった。もし私が自分で成し遂げたものに完全に満足している自力成功型の人間であるならば、これらの歳月に意味を見出し、また当時より向上している、少なくとも裕福になっていることを誇らしく思うこともできようが、こういうことができる自己満足は真っ平だし、また、いくらか出世しスラム街を脱出したことを誇りつつ、薄汚れた勲章を見せびらかすかのように、自分の若さをひけらかしている成功者の語る成功談を読んだりすると、恥ずかく思う。こうした歳月は私にもあったし、また何百万人という人々にもあることは誰でも十分すぎるほど知っている。このような歳月から逃れた人がわずかにいるとすれば、それはハッピーエンドのロマンチックな話ということになるが、大多数の人々にとってはそうした話は始めと終わりが同じであり、彼らの生活は死ぬまで、大きなごみの山からかき集められた低級な、中古のがらくたのようなものである。今述べているその当時から見ると、貧しい人々の運命には大きな改善がみられるが、これは今世紀の偉業の一つである。

私はこうした歳月からやっと抜け出したが、長い間、その歳月を振り返ろうとはしなかった。当時、片田舎の方からグラスゴーの南側へ向かって歩くのは耐えられなかった。私を救ってくれたのは、あのスラム街の医者が回復させてくれた私の健康であった。家族四人がまるで死んでいないかのように、私は死から目をそらし、深刻なことをあれこれ考えるのを避けた。私はサム・K と友だちになった。サム・K とは、五人の回心者でも神の目からみたら貴重だと牧師に言い返した例の青年である。彼は私より少し年上で、グラスゴー生まれのグラスゴー育ちで、私よりもはるかに物事に精通していた。それゆえ、彼は私の悩みの相談相手でもあった。我々は夕方や週末に長距離の散歩をしたり、フットボールを見に行ったり、我々に生じるすべての出来事について熱心に議論し合った。サムは週三回女性とデートをし始めたが、これはグラスゴーでは「決まった女性とのつき合い」として知られているものである。私はその女性の妹とデートをすることになったが、私の恋愛はそんなに長くは続かなかった。サムのはその後ずっと続いた。それゆえ、彼とは以前よりそれほど会わなくなった。そして、ちょうどその頃、私は社会主義に関心をもちはじめていた。サムは社会主義を認めていなかったので、我々は、互いに嫌いになったわけではないが、まもなく疎遠になっていった。

私の社会主義への関心は事務主任のボブによってかき立てられた。彼は突然会社のフットボールの試合のときと同じ情熱をもって社会主義を論じ始めるのであった。私は古典的な反社会主義的議論の方に組み入れられた。この反社会主義的議論は『グレイト・ソーツ』(*Great Thoughts*) を読んで知っていた。私は冷静だったが、ボブは激しやすかった。そして、私が自由な競争の必要性を論証すると、彼はただ、「貧しくてむごい小さな子どもたちのことはどう思うかね」と返答するばかりであった。オフィスの人たちはみな、そしてそこに居合わせたときは荷馬車の御者たちもこぞってボブに反対した。とうとう彼は絶望して、「くそくらえ！お前たちは何もわかっていないんだ。どいつもこいつも無知な奴らだ。なぜ勉強しないんだね」と興奮して叫んだ。若いときおもちゃの耕作機械の鋤で溝を掘る試合で見せた妙技をいつも自慢していた一人の年老いた荷馬車の御者は、「ウォレス、スコトランドの英雄！彼はイングランドの騎兵隊にうってつけの男」と割り込んで歌い、さらに、大きな手をカウンターにピタッと置いて、

軍旗がマール山の山腹に立ち並び、
見事に翻っている、

と歌ったり、感傷的になっているときは、

　　さらば、さらば、我がふるさとよ、

ではじまる移民の歌を歌った。

勉強しろというボブの忠告についに深く感銘し、ブラッチフォード（R. Blatchford 一八五一―一九四三英国の社会主義ジャーナリスト。週刊紙 *The Clarion* を創刊＝訳者註）の『イギリス人のためのイギリス』（*Britain for the British*）を手に入れた。市街電車に座って彼の統計を見ているうちに悲しくなり、直ちにボブに降参した。今度はボブ側につき、ボブといっしょに議論の参加者たちをすべて負かしてしまった。それゆえ、我々は議論をけしかけ続けたが、反対論が出なくなり、議論は消滅してしまった。もっとも、スラム街の少年たちは社会主義の考えを恐れた。少年たちは社会主義を無神論と関連づけていたからだ。荷馬車の御者たちは、ボブと私が、他の点では分別があるのだが、この点では狂っていると確信していたので、無関心であった。それでも我々との関係が損なわれることはなかった。意見が完全に割れた後は、みな清々しい気持ちになった。というのは、社会主義について、ボブが「貧しくてむごい小さな子どもたち」を持ち出してくるとき以外は、自分たちとは何ら関係ないもののように、議論したからである。我々は社会主義を我々の時代には成し遂げられないが、二、三百年後には実現するかもしれないと考えていた。大事なことは、社会主義を信じない人を信じるようにすることによって社会主義のために働くことだった。社会はそういう方向に進化していた。そして進化がある点に到達すると、革命が苦痛を伴わずに起こるのである。進化の過程の論理的な完成として、我々に知的喜びを与えてくれるこの革命が「流血の革命」とは何の関係もないことを我々は注意深く主張した。

ボブは、職場での立場上、社会主義の宣伝に積極的に参加することはできないと思っていたが、私がクラリオン・スカウツに加わることを決めると、激励してくれた。クラリオン・スカウツというのは、ブラッチフォードが発行している週刊紙、『ザ・クラリオン』（*The Clarion*）と関連する団体である。この団体は、毎年冬、日曜日の夕方に、グラスゴーの文化センターともいうべきメトロポール・シアターで一連の講演会を開催していた。そこでは有名人が講演をした。私は日曜日にこれらの講演会に出席するのはいささか冒涜ではないかと思うほど自分が受けた宗教的な教えにまだ忠実であったが、これらの講演会に出席することは私をいっそう喜ばせただけであった。講演後、講演者はたいていチャリングクロス近くのウェストエンドにある心地よい家にあったクラリオン・スカウト・ルームズに我々といっしょにやって来た。講演者の中には当時よく知られていた人も何人かいたが、今ではすっかり忘れ去られてしまった。講演者にはキリスト教社会主義者、無神論者、自由恋愛の提唱者、無政府主義者、それに揺らぐことなく尊敬すべき一般大衆に目を向けた普通の下院議員などがいた。ラムゼイ・マクドナルドは二時間熱弁を振るったが、意味のあることを何も言わなかったのを覚えている。当時でさえ彼は信頼がなかった。エドワード・カーペンターは、ある晩、好きなときに洗濯できるように、特注で裏地のない洋服をつくってもらったと、我々に秘密を打ち明けてくれたが、彼は労働者階級の聴衆が自分を見習ってくれるのを期待していたようだ。ベルフォート・バックスは、歴史的唯物論を論じた長大で複雑難解な論文を見ながら、ぶつぶつ言っていたが、手にもった紙の束から目を上げることは決してなかった。またマダム・ラ・フォルグなるベルギー人がいたが、彼女はヨーロッパで最も危険な女性のスターだった。彼女は大きい黒色のマントを着てステージに上がり、闘牛士のように一振りでそのマントを肩から払い除けた。マントの裏地は深紅色であった。彼女は絶叫するばかりで、支離滅裂であった。彼女のスピーチで覚えているのは、「革命的で、官能的な自由恋愛」を称賛した長い賛歌の終わりの部分だけである。奇妙なことに慣れている我々もこれにはさすがに面食らった。私は日曜日毎に、これらの講演にうっとりしながら聞き入った。突飛な講演、良識的な講演、退屈な講演、様々あったが、みな楽しく聞いた。集会終了後、クラリオン・スカウト・ルームズに移動し、しばらくの間、これらの有名人と同席し、彼らが他の人と同様、お茶を飲み、ケーキを食べるのを目の当たりにし、彼らから笑みを得ることさえできた。しかしこちらから話しかけるようなことはしなかった。

私はもう二十一歳だった。知らなかったが、私の社会主義への転向は十四歳の最初の回心の繰り返しであった。即ち、それは知的な過程の結果ではなく、一種の感情的な変化であった。過去数年の間に貯まった毒物が当面の放出の方途を見出したのだ。私は社会主義の本を読んだ。読んで楽しかったし、またそれらの本は知悉した苦しみの世界からの逃避の手段でもあった。私自身を含め、すべてが変化する未来を発見し、その未来に飛び込み、その未来に生きた。もっとも毎日、荷馬車の御者の勘定を清算し、スラム街の少年たちと冗談を交わしながら、ビール瓶詰め工場のオフィスで働いていたのだが。私は人間の潜在能力を信じ

る気持ちが強かったので、荷馬車の御者やスラム街の少年たちでさえその能力によって変化すると考えた。もはや今の姿ではなく、私が夢みた社会が実現するときになるであろう姿として彼らを見た。私は、カークウォールでの夜、改悛の姿勢から戻ったときに会衆に感じたのと同じ愛情を彼らに感じたが、それはより軽やかで健康的な愛情だった。その愛情によって、未来は、いつか実際に浄化するであろうものをあらかじめすでに浄化してしまっていた。人生においてはじめて、私は普通の低俗な人たちを好きになり始めた。というのは、私の目から見れば、彼らはもはや普通でも低俗でもなかったからだ。私はすべての男性、女性が自由で平等になるときに彼らが手にするであろう栄光の芽を彼らにみていたのだ。単純だが、これは真の想像的な人生観だったし、純粋で現世的な理想像でもあった。今はもう悲惨な青春時代の記憶と共に、宗教を含め、それと関係あるものはすべて捨て去ってしまった。この理想像は現世的であって、それ以上でないという点で間違いであった。実際、この理想像が現世的であったがゆえに、間違いだったのだ。しかし、当時は別な観点から見ることはできなかった。私の過去の人生に対する恐怖心があまりにも大きかったのである。私は生まれてはじめてどのようにして他の男性や女性と共に生きるか、彼らに何を求めたらよいのかを理解した。そして、カークウォールでの回心の後のように、私は再び向かうところ敵なしになったような気がした。それゆえ、社会主義のためにいっしょに働いている者たち同士の嫉妬心や弱点、悪徳にうんざりすることはなかったし、また彼らのすべてに感じた変わらぬ愛情が弱まることもなかった。その状態は長くは続かなかったが、一度その状態を味わい知ってしまったので、時々それを再び呼び起こすことができた。

どの人の人生にも、自分がほんのちょっとの間寓話の一部になるとか、時間の中で数え切れないほど何度も繰り返されているがために永久不変である寓話のドラマを繰り返しているように思えるときがあるものだ。堕落の認識はこうした出来事の一つであり、人生の中で生じる浄化もこうした出来事の一つである。堕落の認識は普遍的な出来事の認識であり、私が述べた二つの浄化も、一つはカークウォールで、もう一つはグラスゴーでの浄化であるが、普遍的な浄化のイメージをもたらしてくれる。カークウォールの夜の後、自分だけでなくすべての人が救われている、あるいはいつか救われるだろうと思った。社会主義への転向もそれと同じ効果をもっていた。それはあたかも、目には見えないが、入りたい人をいつも待っている寓話に踏み込んだかのようであった。以前は、醜いもの、病気、悪徳、それに美観を損なうもの、こういったものに対して拒否反応を示したが、今では、すべての人間が不朽の物質でできているかのように、すべての人間に反感や嫌気ではなく、ごく自然に魅力を感じるようになった。これを強く感じたのははじめてメイデーのデモに参加したときであった。その日のことはいまだに黄金の霧に包まれており、暖かくて晴れていたこと以外にはっきりした記憶はない。思い出すことができるのは、垂れ幕が一寸の隙間もなく風のない空中に漂っていたこと、垂れ幕の折り目が時折愛撫するように、後列を行進している人々の頭や顔を撫でていたこと、また茶褐色のビロードのジャケットを着た背の高い浅黒くてハンサムな男性が金髪の小さな少女を肩車にしていたこと、私のそばを歩いていた太鼓腹の不健康な男性のこと、体が一度いくつかの部分に分解され、再び無造作に組み立てられたような何人かの不格好な体つきの労働者階級の女性たちのこと、裕福な子どもたちとスラム街の子どもたちが混ざり合った集団のことなどである。だが、最も強く意識したのは、すべての区別がどこか他の場所に運ばれていく荷物のように消え去り、すべての物が変化したという感覚だった。

こうした経験がどれほど価値のあるものなのかわからないが、こうした経験が人生に「活かされる」とよいと思う。これらの経験を活かした仕事を成し遂げる方法はまだないようだ。このような経験は日常の生活からは突出している。日常生活というのは、いろいろ区別し、賢い人や愚かな人、善い人や悪い人、清潔な人や不潔な人がいるということを認めなければ、また、例えば、不潔な人と付き合えば、伝染病にかかり、その病気を家族や友人に移すかもしれないということを理解しなければ、できないものだ。こうした状態の心理学的説明の正当性を認めはするが、私の青春時代の悲惨な歳月やそこからの突然の脱出が私の精神状態に何かしら寄与したことは明らかだ。しかし、この精神状態はあまりにも明々白々だったので、これらの説明は、その重要さは認めるが、この精神状態に何ら影響を及ぼすことはなかった。そして、結局、それを単に一種の経験と見なさなければならなかった。それは目覚めているときの生活よりも夢の中で度々得た経験である。夢は寓話の中にすんなりと入っていくが、目覚めているときの生活はそうではないからだ。その経験は、ほめたてられた殺人犯や祈りを捧げる動物の夢の中でのように、性懲りもなく何度も繰り返された。次の夢はこうした夢の中で最も明白な夢の一つである。大雨が降って、私は高い峰から、見たことのない透明な川が心地よい、緑の起伏に富んだどこ

かの田舎を流れているのを見下ろしていた。そこはフランスだと思った。何百マイルもその流れを辿ることができたその川辺に子どもたちが群がり、盛んに水に飛び込んでいた。その後、やや年老いた人たちがやって来て、ついにはとても年老いた男女がそこで沐浴をしていた。すると遠くから、「フランスの売春婦たちが川で沐浴しているよ」と警告する声が響き渡ってきた。売春婦たちはどこかリヨン近くの上流にいることがわかった。これを聞いて、私は不安になった。売春婦たちが川を汚染すると思ったからだ。しかし、これらの川の水は簡単に不純物をことごとく洗い流し、もとの純粋な状態に戻すことができることを知った。売春婦は単なる思いつきで、私の心の中の反響でしかなかった。私は透明な川とそこで沐浴しているたくさんの人たちを楽しく眺め、そしてただ眺めているだけで、あたかも自分までも浄化されていくかのように、この光景によって清々しい気分になった。この夢の奇妙な点は、川で沐浴していた人たちが、川と同じスケールのものではなく、古い地図を飾る船や町や要塞やネプチューンの像のように、かなり大きかったことだが、私はこの夢にたいそう大きな喜びを感じた。起伏に富んだ田舎は地図のようにみえたが、実際の川が人工的に見えるほど生き生きとした深くて純粋な大河が、あたかもその川だけが純粋で、汚れを洗い浄め、絶えず流れているという川の原初の観念と本質を内包しているかのように、そこを貫流していた。

まるで心の糧となる真の食料を見つけたかのように、私は未来を志向している本――ショー（G. B. Shaw 一八五六―一九五〇、アイルランド生まれの英国の劇作家、批評家＝訳者註）、イプセン（H. Ibsen 一八二八―一九〇六、ノルウェーの劇作家、詩人＝訳者註）、ホイットマン（W. Whitman 一八一九―九二、米国の詩人＝訳者註）、エドワード・カーペンター（E. Carpenter 一八四四―一九二九、英国の詩人、批評家＝訳者註）――だけを読んだが、イプセン以外は中身のないものばかりであった。イプセンの他のどの戯曲よりも『皇帝とガリレア人』（*Emperor and Galilean*）が好きだった。この作品は予言的な社会、つまり第三帝国を扱っていたからだ。以来、第三帝国という言葉によって連想していたものはこれまでとはかなり違ったものとなった。だが、最も魅力的だった本は、ハヴロック・エリス（H.H. Ellis 一八五九―一九三九、英国の批評家、生理学者、性心理学者＝訳者註）が序文を書いたハイネ（H. Heine 一七九七―一八五六、ドイツの詩人、風刺作家＝訳者註）の散文選集だった。社会主義に最初に転向した後の夏に、この選集に出会った。その年の夏、私は百日咳にかかった。本当に幸運だったが、百日咳にかかったおかげで、スラム街の私のあの医者のところに行くことになった。彼は、私が元気になるにつれて、通常の二週間ではなく、一か月の休暇を命じてくれた。そして、休暇を叔父のウィリーと叔母のソフィーが経営するオークニーのスケイール（Skaill）の農場で過ごした。そこで、小さな砂の入り江や窪地で日向ぼっこをし、潮騒に耳を傾け、ハイネを読みながら、日々を過ごした。彼の機知、不敬な言葉、魅力は私を夢中にさせた。こうしたものの背後に以前は可能だとは思わなかった未来に対する叙情的な信仰があることに気づいたからだ。「そう、男も女もすべての人が自由になり、美しくなり、この地上で喜びのうちに生きる日がきっと来るのを私は知っている。」ここを読んだとき、涙が目に溢れてきた。私は次の箇所を何度も何度も繰り返し読んだ。

> 喜びに溢れたナイチンゲールが静まりかえった海の赤い珊瑚礁の大枝にとまり、私の先祖への愛の歌を歌っています。真珠はしきりに貝殻からじっと見つめ、見事な水生の花々は悲しみで震え、狡猾な巻き貝は背中に様々な色彩に輝く磁器性の塔を背負いながら這って進み、海洋バラは恥じらって顔を赤らめ、黄色い先の尖ったヒトデや多彩な色のなめらかなクラゲは、身震いしたり、体を伸ばしたりしています。そして皆が群がり、耳を傾けています。
>
> マダム、あいにく、このナイチンゲールの歌はあまりにも長いので、ここには書き切れません。それは世界と同じくらい長いのです。愛の神アナンギスへ献納した歌もスコットの全小説よりも長いものです。アリストファネスにそれに言及した一節がありますが、ドイツ語では次のように読めます。
>
> ティオティオ、ティオティオ、ティオティンクス、
> トトト、トトト、トトティンクス。
> （Tiotio, tiotio, tiotinx,
> Tototo, tototo, tototinx.）

ハイネの不敬な言葉は私を元気づけてくれたし、また私の福音的信心の最後の痕跡も払拭させてくれた。それゆえ、彼が憤慨すればするほど、彼にいっそう多くの美徳を見出した。特に私が気に入ったのは、彼の学校時代とラテン語の不規則動詞との悪戦苦闘の描写であった。

> でも、マダム、ラテン語の不規則動詞―これを学んでいるときに多くのむち打ち刑をくらうという点で規則動詞とは違うのです――は恐ろしく難しいのです。我々の教室の近くにあるフ

ランシスコ会の修道院の湿ったアーチ門には、灰色の木製の大きなキリストの磔刑像が掛かっていました。この像は今でもときどき夢の中に出てきて、血走った目で私を悲しそうに凝視している陰気な像なのですが、この像の前に度々立って、「おお、汝、哀れな受難の神よ。もしできることなら、不規則動詞が覚えられますように」と祈ったのです。

この皮肉な偶像崇拝は私の健康のために必要としたもののようであった。ハイネは長年過ごした死の床で偶像崇拝を放棄したが、私は脊椎カリエスを患っていたハイネと同じではなかった。彼の言葉は、ためらいながらも、私の心に触れたが、私の所に止まることなく、通過して行った。私は、彼の若気のあやまちに熱心に反応し、彼の成熟した知識を無視した。次の一節は、私自身の姿勢を大げさに戯画化したもののように思えた。

　私は若く、傲慢だった。また私の祖母が言ったように、この地上では、天国に住んでいるキリストではなく、私自身が神であるとヘーゲルに教えられたとき、私のうぬぼれは満たされた。それでもこの愚かなプライドは私にまったく悪影響を及ぼさなかった。それどころか、それによって私は英雄的な精神に目覚め、当時単に義務感と道徳律に従って善行を施しているにすぎない有徳な有産階級の最も優れた徳行を完全に凌駕する寛大さと自己犠牲を実践していた。自分自身が生きた道徳律であり、すべての正義と権威の源泉だった。自分自身が道徳の化身であった。ゆえに罪を犯すことはできなかった。私は純粋の化身であり、...愛そのものであり、憎むことはできなかった。...

　あの革命的な時期の多くの神々同様、私は屈辱的にも神の地位を放棄し、人間の卑しい生活に戻らざるを得なかった。私は神の被造物の卑しい囲いに戻った。...以前のように、神の摂理に干渉するにはあまりにも卑しすぎた。またもはや世のため人のためということも考えないし、神をまねることもない。...私は、体があまり健康でない、つまり、病気を患っている一人の哀れな人間にすぎない。このように哀れむべき状態にありながら、特にマチルダが悲しくも度々必要とした休息を求めた真夜中以後に、自分の苦しみの連祷を絶えず唱えることができる者が天国にいるということは私にとっては真の慰めだ。

　最初のくだりは私の願望に近かった。この食物から始まり、私の精神状態がますます維持困難になるにつれ、まさかこれが私を否応なくより激烈な刺激へ、即ちニーチェの著作へ導いていくとは知る由もなかった。しばらくの間、どうしてよいかわからなかったが、その当時はハイネ以外に私を喜ばせてくれるものはなかった。ハイネ以外に私を幸福感に浸らせてくれるものはなかったのだ。この状態は歓喜に満ちた状態だったので、これを放棄することはとてもできなかった。これを失えば、元の泥沼に沈んでしまうのではないかと恐れたのだ。

　ハイネと言えば、その年のスケールでの質素な生活が頭に浮かぶ。農場は教会と教会墓地に隣接した細かい白い砂の湾岸沿いにあった。言動が穏やかで独身者である叔父のウィリーは、同じく寡黙な作男の助けを借りて農場を営んでいた。我々は言葉のない夢の中で食事を摂った。時折、叔父は口を開け、ニュースに出てきた有名なプロボクサーや殺人犯の名前を挙げて、その出来事を遠回しに称えた。それから、優しいが、よそよそしい目で私を見上げ、「チェフリー・アンド・チョンソン」と考え深げに言うのであった（オークニーでは j（「ジー」）は常に ch（「チ」）と発音されていた）。しばらく沈黙が続き、それから今度は作男が顔を上げて、「チェフリー・アンド・チョンソン」とか、変化を持たせたいときには、「チョンソン・アンド・チェフリー」と言うのであった。叔父は会話を切り出すときのこういった手口をいくつか持っており、かつて『ガイ・マナリング』(*Guy Mannering*)（スコットランドの小説家、詩人 Sir W. スコットの小説＝訳者註）を読み、ドミニー・サンプソン（小説の主人公ハリー・バートラムの家庭教師＝訳者註）の性格にたいそう感銘していたので、よその人は驚くだろうが、度々「彼は腕を振り回し、『もの凄〜い』と叫んだ」と口走った。彼は誰よりも穏やかで、優しい人だった。

　叔母のソフィーは叔父とはとても違う性格の持ち主だった。彼女は母親の一番下の妹だったが、子どもの頃はとても可愛くて、色目を使ったりした。昔は体が弱かったが、今では皺のある海賊のような顔をし、筋骨たくましい首のがっしりした老婦人であった。彼女は絶えず消化不良に苦しんでいた。そして、私の手をさっと取り、平たい腹部にその手を押し当て、そこにしこりがあると言って、消化不良のことをあれこれ語るのだった。しかし、私自身はそのしこりを感じることができたのだろうか。彼女はラブレーばりの言葉遣いをする人で、ひょっとして女性といっしょだったのではないのかいと言い、私が赤面するのをみてくすくす笑いながら、ひどく私をからかうのだった。彼女は強欲だったが、とても心優しい人で、もっと気迫をもって女性にアタックできるように、腹

いっぱい食べさせてあげるなどと言ってくれた。彼女はいつもお腹のことをテーマにしたが、その描写たるや実に真に迫っていた。彼女はお腹のことをどこもここも全部知っているようだったが、それには二つの特徴があった。一つは、お腹に穴があいていて、そこが痛いということ。もう一つは、しこりがあることだった。このしこりは架空のもので、実際のしこりだったら切除しなければならなかっただろう。彼女は常に売薬を飲んでいた。時にはそれらをいくつか同時に飲んでいた。彼女は新聞に広告を出していたやぶ医者たちに手紙を書き、これらやぶ医者たちが彼女に勧めた奇妙な食事療法を純粋に文学的関心をもって読んでいた。そして、南の方（アバディーン、エディンバラ、それにグラスゴーは彼女にとっては「南の方」だった）を知っている者としての私に訊くのであった。「ねえ、プレースってあるけど、これは何、教えてちょうだいな。」

「それは魚の一種さ」と私は答えた。

「ソウルね。これも魚の一種かい。」

「そうだよ。」

「それじゃ、食べないですまそう。」

ある日、やぶ医者の一人から手紙を受け取った後、彼女は期待をこめて私にお腹の地図を描いてくれないかと言った。その間、彼女は細々と指示を与えたり、またしこりを突き止めるために再び私の手をその場所に押し当てたりしたが、その地図は私の理解を超えていた。

最初の休日をウィリーと過ごしたが、その後の休日もすべてオークニーで過ごした。楽しい二週間だった。体の不調や心配事もすべて失せた。私は休日をスケールで、それからカークウォールのジョン・リッチの家で過ごした。ジョンは農場をやめて、仕立て職人に戻っていたが、彼は今まで以上にハンサムで、あか抜けていた。彼といっしょにいるだけで、とても楽しかった。彼はとても容姿端麗で、感じがよかった。私が覚えている彼の唯一の言葉は、彼の親友である私の父親への墓碑銘ともいうべき言葉であった。「チームズ・ミュアは善良な人であるだけでなく、温和な人だったよ」と言った。ジョン・リッチはこの「温和な」という言葉を特に古い意味で、つまり、父親が人の感情を害することなく暮らしたという意味で使っているのである。それゆえ、この言葉は誰にも与えられないほどの最高の称賛のように私には思えた。

叔母のマギーはカークウォールに住んでいたので、ある日の午後彼女に会いに行った。しかし、それが最後になるとは知る由もなかった。彼女は確かに現世的な人であった。胃のゴロゴロを大量の重曹で鎮めねばならないすねた女性だった。気難しさがそこでも働いていた。年を重ねるにつれ、私が本能的に避けていた穏やかな信仰心が彼女の中で深まっていった。家の中に入ったとき、彼女は骨のないような柔らかい手で私の手を取り——彼女の骨さえも柔らかくなったように思えた——それから、耳をつんざくような声で私をキリストに導こうとした。彼女は通りの奥まったところにある小さな部屋に一人で暮らしていた。彼女は、人生に見返りなしに愛する許可以外に何も求めなかった。私は、何も要求しない、驚くほどあからさまな絶対的謙虚さに触れ、幸福感に満たされ、身震いし、哀れみとかすかな反発心から手を引っ込めようとした。もし彼女がここから逃げ出したいという私の気持ちを感じ取ったならば、直ちにそうさせたであろうが、私の救いを願う強い気持ちは何ものも寄せつけず、彼女は青春の盛期にキリストのもとに来るように懇願し続けながら、長い間私の手を握っていた。この小さな部屋は私がいたいと思う世界から遠く離れているように思えた。私は動じることがなかったので、彼女の手から自分の手を容易に引き離し、彼女のもとを立ち去ることもできたのだが、愛情のこもった、穏やかな、滔々と流れる言葉に魅了され、気が重く嫌々だったが、我を忘れて座り続けた。そして彼女のもとを立ち去りたいと思ったが、何の慰めも与えずに立ち去りたくはなかったので、最後に彼女に生半可な約束をした。彼女はその後まもなく亡くなり、再び合うことはなかった。

ハイネからはいろいろ有益なことを学んだが、それと共にその段階の自分にはそぐわない特質をハイネから借用した。その特質とは何を言うにも皮肉まじりに言う習慣である。この習慣は、皮肉を、特に悪辣な皮肉を認めない友人たちとの関係に悪影響を与えた。私は二十代初期の多くの人たちと同様、感傷的になることには容赦しなかった。その理由はよく理解できた。若者というのは自分の感情をはっきりと理解しているが、同時にそれに自信がもてないのだ。自分の感情を理解しているために、カリカチュアにみえるこれまでの因習的な感情を軽蔑するのだが、一方自分の感情に自信がもてないために、深い感情を、間違いであるといけないので、信用しないのだ。若者には批判の基準が必要なのだが、それをもっていないから皮肉に頼るのだ。ハイネは感じることと同時に自分の感情を嘲笑う術の手ほどきを授けてくれた。それにしても、いつまでも笑っていると、感情が萎んでしまい、笑いが感情の地位を奪ってしまうのだ。そしてしまいには、笑いの種を作り出さなければ、笑いの種がほとんどなくなってしまうのだ。ほどなくして、私の幸福感には皮肉が浸み込むようになった。実際、ときには落ち込んだこと

もあったが、私の考えではそれは当時は罪であったのだ。かつてはすべての人間を愛するように仕向けた私の未来への信仰は、今では非人間的であることが明らかとなったが、未来への信仰をすべてにまして愛していたので、私はそれを固守し、人間のことはどうでもよかった。もはや苦しみを描写したものには関心がなかった。というのは、私が固守していた人類の理想像には苦しみは存在せず、悪や欠点や歪みはすべて超越されていたからである。哀れみは人間の最高の希望に対する裏切りだというニーチェの非難の文章をどこかで読み、それを熱心に奉じた。未来は人類と共にあるのではなく、超人と共にあるのだという考えは、私がまだ明確にすることができなかった問いに対する答えのように思えたが、それにどうアプローチしたらよいかわからず、心密かに悩んでいた。

この間、私はビール瓶詰め工場で働き、日曜日にはクラリオン・スカウト・ランブリング・クラブの人たちと出かけ、社会主義のデモや街頭の集会に出席し、そして社会主義のダンスパーティーに出掛けた。そこで好感のもてる、ハンサムな青年のトム・M と友だちになった。彼は自由思想を抱く社会主義の家庭に育った。我々は片田舎を散策したり、ダンスをするのが好きだったが、何人かの社会主義者のように、風変わりを装うのは好まなかった。トムは独立労働党（一八九三年 K・ハーディによって創設された＝訳者註）の党員だったので、私も入党した。毎週日曜日の夜、我々は一人の老練な社会主義者によって運営されていた演説者のクラスに出席した。労働者階級の母親たち、ドックの労働者たち、婦人参政権論者たち、その他様々な人たちがそのクラスに出席していた。我々は、数週間の指導を受けた後、一人ひとり演壇に上がり、十分か二十分の間、人前で演説しなければならず、また、その後質問にも答えなければならなかった。

もう一人の青年ジョージ・L といっしょに教会の文学サークルに出席した。次の段階は教会を転向させることだと彼は確信していた。彼もまた自由思想の家庭に育ったが、自分の育ちに反発し、原始キリスト教徒になった。彼はハンサムな聖職者の虚ろな顔をした単純で独断的な青年だった。彼はとにかく元気に動き回る、活発なキリスト教徒であった。彼の顔を見る限り、彼にはいかなる選択の余地もなかった。キリスト教をまったく独力で見出し、教会はキリスト教について何もわかっていないと確信していた。「神(God)」は実際、「良い(good)」もしくは善の原理を意味しており、この二語は語根が同じだとか、またこの善に対して、理性的な存在として不信仰者はどのように反論するのかといった議論によって、不信仰者を回心させようとした。一方、キリストが社会主義者であることを教会が理解していないことを知り、文学サークルの彼の活動で、この真実をサークルの人たちの心に刻み込もうと努力していた。議論のテーマは――トマス・ハーディーの悲観主義であれ、ジョージ・メレデスの楽観主義であれ、近隣の野生の花であれ――何でもよかった。その中でとにかく、キリストが社会主義者であり、教会がこれを無視するのは重大な誤りであることを示したかったのだ。あたかも著しいパラドクッスであるかのように、彼はいつも決まってそれを持ち出した。彼にとってキリスト教はまだ新奇な信条であったし、また神は愛であるといった原理のいくつかも彼にとっては、イプセンやショーの進歩的な考えと同じように、新奇なもののようであった。彼は簡潔で効果的な言い回しをそれ自身のために好んだ。それゆえ、神は愛であるといった主張も、彼にとっては得も言われぬ神秘ではなく、議論にけりをつけるための簡にして要をえた方法であった。彼はまるで警句を案出するかのように、最も陳腐な言辞を編み出した。彼はこの簡潔な言辞に自信を持っていたので、彼に反対する議論は単に問題を避けようとしているに過ぎないように彼には思われた。彼のお気に入りの言い回しは「彼には用がない」だった。彼はプラトン、シェイクスピア、モンテーニュ、パスカル、ヒューム、マルクスその他多くの著作家には用がなかった。彼は尊大で、はったりで身を守っていたので、サークルの仲間たちは彼を恐れた。私は彼の誤りを訂正しようとしたが、とうとう彼が「彼らに教えてやったよ」というのを聞いてうんざりした。というのは、人は「教えられる」のがいやだということを私は知っているからである。ついに私は彼に随行することをやめた。彼は、自分には教会を転向させる力と知的装備が備わっていると確信しながら、あるいは見たところそう確信しながら、わずかな陳腐な考えを武器によいことなら何でもやろうとしている不幸な青年であった。彼のやったことはみな無垢な虚栄心によって損なわれてしまった。彼は進歩的運動のすべてに見られるあるタイプの典型的な人物だったので、彼と知り合いになったことを嬉しく思っている。

この頃、私は『ザ・ニュー・エイジ』（*The New Age*）を取り始めていた。この文芸雑誌はオレージ（A. R. Orage 一八七三―一九三四、英国のジャーナリスト、社会主義者＝訳者註）の管理の下に編集されていた。これを読むことで優越感を覚えたが、その優越感が私のためにならなかったのは確かであった。私は編集者の、本誌は「ジェントルマンのためにジェントルマンによって書かれた」といった意味の言葉にいささか当惑したことを今でも覚えている。

しかしその言葉は私の知性を刺激し、感傷的になることへの軽蔑心をいっそうかき立ててくれた。オレージ自身の政治的、文学的批評を除けば、この雑誌の基調は甚だ偉ぶっていることと、高級ぶっていることだった。危うく称賛するところだった同時代の著作家の何人かは驚くほど粗末に扱われていた。これを頼みに、私は自分に権利のない非難の趣味を身につけた。そして友人の誰かが新刊本をこれはいい本だといさんでもって来ても、二言、三言で彼を打ちのめすことができた。もっとも、彼のその本に対する熱の入れようは本物で、私の非難は借り物だったが。それでも、この『ザ・ニュー・エイジ』は、同時代の政治や文学の状況（私にはとても必要なものだった）を余すところなく教えてくれたし、またもしそれがなければ長い時間がかかったはずのプロセスをわずかなパンチのきいた打撃で短縮してくれた。

私は依然としてクラリオン・スカウツのメンバーであった。そして、時折ランブリング・クラブの連中といっしょに出歩いた。やがて私はクラリオン・スカウツのより高級なサークルに加わり始めた。このサークルの人たちは、ふざけてであったが、「インテリ」として知られていた。我々はランブリング・クラブの連中のばかげた行動を大目にみたが、こうした連中には加わらなかった。というのは、彼らとは理性的な会話ができなかったからだ。我々は自分たちだけで片田舎を散策し、ありとあらゆることを議論した。生物学、人類学、歴史、性、比較宗教学だけでなく、神学さえ議論した。というのは、我々は、「宗教は大衆のアヘンである」といった大衆の迷信を受けつけなかったからだ。我々の中にはこの言葉をマルクス主義にぴったり合っていると考えている者もいた。また我々は、日曜日の夕刻、だれかよほど重要な人物が演説するのでなければ、メトロポール・シアターには行かなかった。単なるプロパガンダの宣伝者や下院議員などには目もくれなかった。ベルグソン、ソレル、ハヴロック・エリス、ゴールズワージー、コンラッド、E.M.フォースター、ジョイス、それにロレンスなどの著作家を発見しながら、当代の文学的、知的発展を追求していった。ジョイスとロレンスに関しては私が寄稿した。エズラ・パウンドが『ザ・ニュー・エイジ』で二人に言及した記事を見たことがあったからだ。ドストエフスキーは、人気があったが、大いに物議をかもした。私はドストエフスキーにはひどく反発した。彼は人間の苦しみを不快なほど痛感させたからだ。哀れみは人間の究極的な希望への最悪の裏切りだという信念を私はまだ捨てていなかった。しかし、同時に彼に完全に魅了され、読み続けざるを得なかった。そして大量の毒を飲んでいると感じたが、立て続けに『罪と罰』と『白痴』を飲み込んだ。エグリントン街とクラウン街は、これまでいつもどこかにいたかのように、またこれからもいつもどこかにいるかのように、シベリアほどはるか遠くで再び蜂起した。私は彼らを解散させ、突然ドストエフスキーを読むのをやめた。そして、ドストエフスキーに関するすべての議論では敵側にまわった。彼の薄汚い世界は私がこれまで投げ捨ててきた薄汚い人生と酷似していたのだ。

私ははじめて知的な会話に聞き入ったり、参加したりした。それまで私の知的生活は孤独で、いつも新しい本を見つけては読んでいたが、それを語る相手がいなかった。私は二重の生活を送っていた。知的な発見のまったく私的な生活と本の題名などが唇からもれることのない、他の人たちと同じように行動するように注意を払っていた生活である。心置きなく自由に話したり、聞いたりできるようになったときは、安堵と感謝の深い気持ちでいっぱいであった。グループの他のメンバーたちは文学を除く他のすべてについて私などよりはるかに多くのことを知っていた。私は生物学や人類学や歴史についてはほんのわずかな知識しかもっていなかったが、メンバーの中にはこれらについてよく知っているものがいた。グループは学校の教師、公務員、事務員、店員、セールスマン、石工、技師、タイピスト、看護婦などで構成されていた。我々はみな会話の知的な水準を求め、定めた。我々は未来を信じる気持ちに溢れ、新しい時代の先端にいると感じていた。我々はみなこうしたことを知り、心が高ぶっていた。そしてこの心の高ぶりは我々の知性と感覚を刺激した。この時代はショーとウエルズの時代で、私を除いてみなこの二人に絶対の信頼を置いていた。私はショーが嫌いだった。彼の未来像が偽物にしかみえなかったのだ。

私はグループのメンバーの一人であるジョージ・トムソンと親しくなった。彼は私よりもやや年上で、私が彼に与える以上に多くのものを私に与えてくれた。彼の歴史への関心は止まるところがなかった。そして人類の実際の歴史を背景に広い視野で未来を考えるように倦まずたゆまず教えてくれた。彼は物事の始まりと発展に魅了されたヒューマニストであったが、私は終わりに目を向けていたので、もどかしくなりそれらを無視した。彼は詩を読んで楽しんでいたが、しばらくの間私は詩を放棄していた。本当の歌が歌われて来なかったことや、過去のすべての詩は死んだ、あるいは死につつある世界の長期にわたる反響でしかないというのがその言い訳であった。彼の話を聞いているうちに、過去を捨てることはすべての知識や人生を捨てることだということを次第に理解し

はじめていたが、私はこのことを理解したくなかった。クラウン街やエグリントン街の亡霊たちがこの理解に覆いかぶさっていたし、この亡霊たちの背後には、私が直面できずにいたグラスゴーでの最初の五年間があった。私は歴史の本を読むように努めたが、満足できない概略的な記録や常に偉業でも何でもないことが明らかになる偉業の話が私を悲しませ、私の信念を徐々に危うくしていった。もしこれが過去の歴史の働きだとすれば、未来の歴史はこれと違った働きをするのだろうか。私はハイネの一節を思い出し、それをハイネの大の称賛者であったジョージのところにもっていった。その一節とは、マキシミリアン皇帝が、チロルの地下牢に閉じ込められていたとき、唯一残った従者の宮廷道化師クンツ・フォン・デル・ローゼンに慰められる話であった。

「皇帝様は今はこうして足枷をかけられておりますが、最後には皇帝様の良き正義が立ち上がり、自由の日が近づき、新しい時代が始まります――わが皇帝様、夜は終わります。そして外ではあけぼのが輝いています。」
「わが道化師のクンツ・フォン・デル・ローゼンよ。そちは間違っておる。そちはおそらくきらきら輝いている斧を太陽と間違えているのだ。そしてあけぼのは血以外の何ものでもないのだよ。」
「いえ、皇帝様、確かに太陽でございます。西から上がっていますが――六千年の間、人間は太陽が東から上がってくるのをいつもみてきましたが、もう進路を変えてもいい時期なんですよ。」

歴史のあらゆる妥協や調停に精通した頭の回転の速いジョージがこれにどういう答えを見出したかわからないが、その答えがどうであれ、当時の私には強い印象を与えることはなかった。ハイネの皮肉な想像は、私にとっては、自分の希望を嘲笑い、嘲笑った後いっそうその希望にしがみつく口実にすぎなかったのである。

こういう状態がおよそ三年続いたが、自分の未来像に従って行動することが益々難しくなっていたので、もしニーチェとの出会いがなかったならば、その状態は修正ヒューマニズムに堕していたであろう。ある日、私の架空の世界が周囲で崩れはじめているのを感じ、勇気を出してオレージに手紙を書き、アドバイスを求めた。それはまことに無礼千万なことだった。私が彼に主張できる唯一の権利と言えば、彼の記事を毎週読んでいることぐらいだった。彼は長くて懇切丁寧な返事をくれた。その中で彼は自分自身の若かりし頃の知的葛藤を詳細に語り、またある特定の著作家を取り上げ、その偉大な知性の働きを理解したと感じるまで、その著作家が書いたものをことごとく研究したことで大いに助けられたとも述べていた。こうして彼はプラトンを数年間研究し、今は『マハーバーラタ』（古代インドの叙事詩の一つで、紀元前五世紀頃のインド北部の二王家の争いを歌ったもの＝訳者註）を研究していて、それを私に暗に推奨しているようだった。ある特定の著作家を研究するという彼の助言を受け入れたが、しばらく躊躇した後、『マハーバーラタ』ではなく、ニーチェを選んだ。それは未来についての中断していた自分の思索を最も持続させそうな選択であり、また自分を知恵に最も導きそうにない選択であった。私はドイツ語は読めなかったが、完全な英語版がオスカー・レヴィー博士（O. Levy　一八六七―一九四六、ドイツ生まれのユダヤ系の内科医及びニーチェ研究家。一九〇九年から一九一三年までニーチェの著作の英語版を監修した＝訳者註）の監修で出ており、比較的安価であった。私は一冊ずつ買い求め、夕方になると文章に印をつけたり、印をつけた文章に戻ったりしながら、注意深く読んでいった。こういうことが一年以上続いた。怪しい力を感じながらも、すべての価値の転換という考えに酔いしれた。ビール瓶詰め工場の一介の事務員であった私は、貴族の信条を取り入れ、それまでオークニー人（グラスゴーでいくぶん失ったが）であることを嬉しく思いつつ、いくぶんためらいながら、自分を「よきヨーロッパ人」だと考えるようになった。「へまでどじな奴ら」が落ちぶれていっても、助けるのではなく、追い討ちをかけよといった忠告など、私は自分が読んだ多くのものに反発した。私の社会主義とニーチェ主義とはまったく相容れないものだったが、これを認めることを拒んだ。もしキリスト教が「奴隷の道徳」であるならば、私はそれによって利益を得ている奴隷の一人であるとは考えなかったし、「上層階級」に属していることを自負できないとは考えなかった。それより、私にはニーチェの考えを批判する能力もなかったし、批判したいとも思わなかった。というのは、ニーチェの考えはまさしく私が望んでいたものを与えてくれたからである。つまり、それは私の消滅しつつある未来の夢の最後の何としても欲しいよりどころであったのだ。「本来の自分になりなさい」とか、「人間は超越されねばならない存在だ」とか、「自分を殺さないものは自分を強くする」といった文章を読むと、私の胸は膨らんだ。しかし、胸は膨らんだが、熱くはならなかった。頭は燃えていたが、私の自然な幸福感は、益々冷徹な領域に入り込み、そして「永劫回帰」という恐ろしい思想に直面するうちに、いつしか消えていた。ニーチェの最後の著

作、『偶像の黄昏』と『この人を見よ』を読んだとき、これらの著作が狂気に染まっているという事実を無視しようとした。というのは、狂気は正統なニーチェの基準だったからだ。うまくいかなかったが、無視するふりをし続けた。こうした中で、これまでにない規模の悲惨さに再度投げ込まれたときでさえ、私は知的な面では依然としてニーチェの信奉者であった。自分を支えるために、私は「知的誠実さ」という標語を掲げ、その名において、感情の誠実さや私が日々接触している世界を知覚する際の誠実さに対して考えられ得るあらゆる罪を犯した。実際、私は知らなかったが、私のニーチェ信奉は心理学者のいう「代償作用」だったのである。私はこれまでの自分の人生と向き合うことができず、超人の夢想に逃避していたのだ。私はすでに自分の仕事が成り行き任せであることを理解しはじめていた。事務員としての生活にだけは期待できたのだが、その仕事を続けて中年になり、背中が丸くなり、白髪混じりになっていく自分を考えたとき、意気消沈してしまった。しかし、こうしたことは、仕事帰りに市街電車に座り、周囲の疲れ果てた中年の会社員たちを目の当たりにしたときは別として、稀にしか考えなかった。そうしたことを考えたときはすぐに自分の考えを別な方向に向けた。私の数年前のハイネの時期だったら、これらの人たちに少なくとも哀れみを感じたであろう。しかし、一年間超人と付き合った後では、彼らは単に恐怖で私を満たすだけであった。これを認めなければ、私は不幸であったし、不誠実でもあった。それはともかく、ニーチェはよい英語に対する私の感覚を破壊してしまった。ニーチェの多くの著作の英訳はひどかったからだ。数年後、はじめてものを書きはじめたときに書いたのは、感嘆符を散りばめたまがいもののニーチェばりの散文であった。もしそれが「代償作用」（この代償作用がなかったら、人生に向き合うことは困難であっただろう）だと理解していなかったら、自分の生来の好みや判断、それに毎日の自分の経験に反して、ビール瓶詰め工場の一介の事務員に少しも似つかわしくない哲学に固執していた自分のひねくれた根性にいささか驚いたであろう。「堅固なれ」というのは、ニーチェの訓戒の一つであるが、私はニーチェを捨てるほど堅固ではなかった。

後年、精神分析の治療を受けていたとき、ニーチェの夢をみた。夢の中で私はニーチェを妙に批判すると同時に心酔していた。私は磔の刑をじっと見ている群衆の中にいた。磔にされている人はキリストのように顎髭をはやしているのではないかと思ったが、驚いたことに、分厚い口髭以外は綺麗に髭をそっていた。それは疑いもなくニーチェであった。彼はあたかも十字架を簒奪したかのようだった。もっとも多くの簒奪者と同様、十字架上でまったくくつろいだ様子だったが。そこがこれまでずっと捜してきたが、大変驚いたことに、とうとう見つけた場所だ、いや征服した場所だと言わんばかりに、彼は反抗的な態度で周囲を睨みつけていた。彼は他者の地位を激しく奪取した人のようだった。彼のこめかみは痛みで苦しみ、ゆえに神経が薄い皮膚の下でピクピク動き、苛立っているのを見ることができた。顔はしかめ面で、その中でもじゃもじゃの眉は引きつっていた。だが、目には勝利の表情が浮かんでいた。この夢に私は当惑した。この夢はニーチェの哲学と釣り合わないように思えたからだ。しかし、この夢は実に夢らしい夢であった。十字架はその人物にぴったり合っていたように思えたし、その人物も十字架にぴったり合っていたようだ。そしてニーチェの生涯は、愛ではなく、うぬぼれゆえの一種の奇妙な自己磔刑であったことが次第にわかりはじめた。この夢はニーチェ自身がみた夢を思い出させた。ニーチェ自身の夢のことはアレヴィー（D. Halévy、一八七二―一九六二　フランスの歴史家、評論家＝訳者註）のニーチェ伝に記されている。彼の手がグラスに変わり、その中に何かの理由で飲み込まなければならない小さなカエルが座っていた。何度かそれを飲み込もうとしたが、吐き気に身もだえし、飲み込めなかった。これがニーチェの夢である。私は、まるで自分とニーチェを重ね合わせるかのように、まだグラスゴーにいたときだが、少し後に同じような夢をみた。私は自分の手をみていると思った。そしたらその手は透明になっていった。そのためすべての血管が枝分かれして流れているのを見ることができた。血管をじっとみていると、血管の間で体をくねらせながら何かむさぼり喰っている黒い虫がみえた。私は冷や汗をかいて目をさました。その夢は、恐ろしいことに、自分自身が善悪を超越していると考えていたときの精神状態を示していた。

同じ頃、会社に変化が起き始めていた。それが私の心をかなり不安にさせた。頬がピンクで白い口髭を短く切りそろえた小柄で粋な老人が会社のあちこちに出入りするようになり、会社のオーナーとボブと事務所の奥の部屋で長い間話し合いをしていた。会社の経営者が変わるらしいという噂が流れ始め、ボブは冷静さを失いがちだった。我々はみなこの小柄で礼儀正しい、人当たりのよい老人を恐れた。後でわかったことだが、それは当然だった。しばらくして彼は会社の支配権を握った。私がそのことをはじめて知ったのは、土曜日の朝、従業員の賃金を計算していたときだった。だれがだれだかまだわからない新オーナーは賃金帳簿を

見せてくれと言った。私は彼の側に立ったが、その間彼は二、三人毎に名前を鉛筆でチェックしながら、帳簿にさっと目を通していた。それから「今日これらの人たちに一週間前の解雇通告を与えるように」と言い、オフィスを出て行った。それまで私は従業員に対する雇い主の力というものを知らなかった。私は解雇される人をみんな知っていた。そして悲嘆に暮れてボブのところに行った。ボブは不機嫌に肩をすくめ、命令されたことをやれと言った。

解雇された何人かの男性の代わりに若い女性が何人か直ちに採用された。その後オフィスの事務員の一人が解雇され、代わりに一人の女性が雇われた。次は自分の番だと思い、辞めろと言われる前に自ら辞めたかったので、新しい仕事を捜しはじめた。ついに申し込み先の一つから返事がきて、町のオフィスに来るようにという要請を受けた。そこは、ビール瓶詰め工場の煤けてはいるが、思いやりのあるオフィスとはまるで異なり、大きくて、反発を覚えるほど清潔なオフィスであった。私は応接間に案内された。そこには背の高い白髪混じりの疲れきった様子の男と小柄で熱心な、目の鋭い男がいた。二人は私にいわば過酷な尋問をしてきた。私は二人のこともオフィスの佇まいも好きにはなれなかったが、私が働くところはそこではなく、フェアポートにある工場のオフィスだと彼らは言った。そこで何が待ち構えているか私には知る由もなかったが、解雇を言い渡される前にビール瓶詰め工場を辞めたいと思った。それで新たな仕事に就くことになったが、まったく何も知らずに、私は新たな悲惨の時期に入り込んで行った。

第　四　章　フェアポート

グラスゴーを去ったとき、どんな仕事が待ち構えているのか皆目見当がつかなかったが、私は八月末の暖かい夕刻、ファアポートで列車を降りた。これまでここに来たことがなかったので、だれも知り合いはいなかった。しばらく駅周辺を立って眺めていたが、駅は、すべての工業都市の駅のように、煤けていて、湿っぽく、朽ちかけているようにみえた。そうこうしているうちに、微かではあるが、あれと思わせるような臭いに気がついた。私はそれに注意を払わなかったが、払うべきだった。

フェアポートで就いて、二年間続けた仕事は骨工場での仕事だった。そこは、スコットランド全土から集められた新鮮な、あるいは腐敗しかけている骨を炉の中に投入し、炭にする場所だった。炭は砂糖精製所に販売された。グリース(獣脂)がドラム缶に満たされ、もう忘れてしまったが、何かの目的のために発送された。ゆっくりと身をくねらせている、黄色の太ったウジ虫の花綱で飾られた骨は隣接している鉄道の側線にもあって、それらは炉の準備ができると、工場へと運ばれた。河口から飛んでくるカモメはいつもこれらの骨の周りにいた。また側線に入っていたときの貨車はまるで動く雪だまりに被われているようだった。貨車があまりに長い間測線に入っていると、グラスゴーから激しい苦情が来た。カモメがたちまちおよそ二十五キログラムのウジ虫を平らげてしまうからだ。というのは、骨は元々の重さで支払われ、ウジ虫も重さの一部であり、会社としては重大な損失となるからだ。こうした苦情が来た後、アイルランド人の職長はカモメに向かって二、三発銃を発砲するのであった。発砲したときは突然窓が暗くなるほど一斉に飛び立っていくのだが、しばらくすると、また戻ってくるのであった。

骨は黄色で脂ぎっており、腐敗した肉片がくっついていた。これら生の骨は強烈な、すえた、鼻を突く臭いがしたが、その臭いは、骨がウジ虫といっしょにシャベルで炉に抛り込まれる時の強烈な悪臭と比べたら何でもなかった。その悪臭は分解作用、病院、屠殺場を思わせるような、やんわりとまとわりつく甘い臭いであり、下水の悪臭であり、腐った肉が焼けているような悪臭であった。夏の暑い日には、それはガラスの壁のように工場の周辺に漂っていた。東風が吹くと、その臭いは町のほとんどを被った。まともな家族がその悪臭の井戸の中でハイティー（遅めの午後のお茶に簡単な肉か魚の料理を添えたもので、これで夕食が済んだことになる。英国のある地域、特に北部に見られる習慣＝訳者註）の席に着いていた。多くの人たちはこの臭いを健康によいと考えていた。

工場の労働者はほとんどプロテスタントのアイルランド人だった。男性は時給四ペンスだったが、女性はそれ以下だった。骨のグリースは、労働者の衣服、皮膚、髪の毛、それに爪の下などに染み込んでいた。彼らはどこに行ってもすえた脂の臭いを漂わせていた。

ここには生涯を骨に身を埋めて過ごしてきた老練で忠実な労働者たちがいた。彼らは気難しくて封建的だった。そして若い C 氏に解雇される心配もなく、自分たちの考えを述べることができることを自慢していた。彼らは骨置き場で昼食を摂りながらふざけて互いに骨を投げ合ったりするなど、骨を自由に弄んでいた。年をとった者たちは嘲笑いながら、先の尖った、乾燥した骨でお茶をかき混ぜていた。時には喧嘩も起こった。あるとき工場が忙しくて、十数人のカトリックのアイルラン

ド人が採用されたが、自分たちの宗教のことは何も言うなと言われていたのだが、プロテスタントの人たちは彼らをかぎつけ、辺り一帯が薄暗くなるほど骨を投げ飛ばして、庭で大げんかをした。血とウジ虫に被われたカトリックの人たちは急遽事務所に呼び出され、給料の支払いを受けて解雇された。

会社はありきたりの事業方針で経営されていた。老C氏は週に数回グラスゴーからやってきた。彼はこざっぱりとした、目の鋭い、リンゴの頬をした小柄な男で、むせぶような声の持ち主だった。彼は給料を十分払っていない償いとして従業員たちを洗礼名で呼んだ。貨車がカモメに被われていると、彼はオフィスに入ってきて、私を非難するような目でみて、「これではだめだ、エドウィン君、これではだめだ。ロビーはどこかね」と言うのだった。ロビーというのは職長であるが、彼はいつも何か言い訳し、ただみえすいたお世辞のみを使って、この老人を喜ばせ、送り出すのであった。ロビーはオフィスで二匹の犬を飼っていた。一匹は黒のリトリーヴァーで、もう一匹はスカイテリアであった。この二匹は骨を持ち込んでは取り合いをし、私が中に入って二匹を引き離さなければならなかった。

骨の重量を報告することと骨の処理過程の様々な段階で漂ってくる臭いに耐えること以外、私は会社の利益の源となっている骨とは何の関わりもなかったが、自分が堕落していくような気持ちを食い止めることはできなかった。初めは骨置き場などに存在しない清潔さを保持しつつ、仕事を厳正にやることでその気持ちと戦ったが、それさえもできなくなってしまった。注文の発送がいくらか遅れ、グラスゴーから苦情が来ると、ロビーからは筋の通った説明が一切なされなかったので、私が即興で説明しなければならなかった。もう一人の事務員は、老人で私のポストを欲しがっていたが、嫉妬心から、知っていることを自分だけのものにし、だれにも教えなかった。その後雑用係の少年がもっとよい仕事を得るために辞めていった。そして代わりにグラスゴーで窃盗の現行犯で捕まった若者が送り込まれてきたが、彼のことは何も知らされていなかった。私の机の中の小口現金箱のお金が少しずつなくなりはじめた。私はこのことを若いC氏に言った。彼は妙に無関心のようであった。とうとう私はそのお金には責任がもてないと言った。老C氏がグラスゴーから呼ばれてきた。その雑用係の少年は私の机に合った鍵をもっていたようだった。そこで啓発的な光景が繰り広げられた。少年は憤慨していたが、突き出され、泣き崩れた。

こうした困難な状況の下で、ありきたりの会社にいるように自分の仕事を遂行していこうという決意が崩れた。私はロビーのように、責任逃れをし、口もうまくなった。仕事も遅れるし、またグラスゴーからの苦情には曖昧で、安心させるような返答をするようになった。そして万事がうまくいった。私は期待されている通りに振る舞った。この弱さに屈すれば屈するほど、私の良心は私を痛めつけたが、効果はなかった。私は、やらなかったことを思い出しながら、また人の道を踏み外しているのではないかと思いながら、夜中によく目を覚ました。明日こそは正常な状態に戻そう、また別な仕事に応募しようと決意するのだが、明日になると何もしなかった。最初の六か月は様々な仕事に応募したが、一年間その職場にいた後は、手紙はほとんど来なくなった。私はフェアポートから出られないのではないかと思った。こうした不安と恐れの瞬間は、淀んだ水溜まりに投げられ、わずかに細波を立てて、微かに不快な臭いを放すが、それ以上のことは何もしない石のようなものだった。

こうして私は自らを卑しめたが、それは一つにはグラスゴーの本部との関係によるものだった。本部は常に潔白で手抜かりがなかった。そして何よりも悪いことに、たいてい正しかった。フェアポートで我々は利益を捻出し、罪を犯した。そして罪を犯した張本人を責めないで、その罪の責任を負うのが私の仕事だった。罪は私がこの職に就くずっと以前から犯されていたので、グラスゴーの本部の人たちの頭には、フェアポートでなされていることはすべて悪だという信念が定着していた。それゆえ、本部から毎日来る手紙はお決まりの侮辱的な文体で書かれていた。最初のうちはやけになってこのような文体が使われたのではないかと思う。フェアポート工場の仕事が当てにならなかったのだ。注文を何とか間に合わせたときはみんなでたいそう喜んだ。他方本部も無謬ではなかった。本部は何日も、ときには何週間も明らかな手抜きや大失態を見逃していた。それで本部もそれらを忘れてしまったのだと我々は思いはじめていた。ところがある朝、手厳しい手紙が届いた。そしてその手紙でグラスゴーのある事務員が処罰を受けるなど辛い目に遭っていたことを知った。

私は毎日これらの苦情に返答しなければならなかった。私はフェアポートが悪いとは決して認めなかった。というのは、それを認めることはルール違反だったからだ。しかし私は、本部のだれかがまれにミスを犯したとき以外は、本部流にやり返えすことはできなかった。フェアポートでは我々は常に叱責されながら生活していた。そして不潔と悪臭の中で利益を捻出しながらも、いつも我々の方に非があった。私自身が誤りを犯したわ

けではなかったが、年がら年中、毎日毎日、言い訳をしたり、あるいは陰うつなことに、嘘をついたりしなければならなかった。そして、心にやましいところがないかとか、難癖をつけられるのではないかといつも思う癖がついてしまった。

こうしたことはやる気をなくさせたし､思うに、以後長年私を悩ませ続けた得体の知れない恐れや不安の原因でもあった。さらにやる気を削いだのは、不潔と悪臭――特に悪臭――の中で生活することだった。しかし、薄汚れた沈殿物のように私の内部に徐々に巣食っていった一種の客観的な恥辱、これは最悪だった。この恥辱は悪事を働いたときなどに感じる恥辱とは違い、肉体的なものだった。私は骨に触る必要はまったくなかったが、骨の悪臭は周りに染み込んでいたので自分も工場の労働者のように骨の臭いがするのではないかと思うようになった。それゆえ、夕方や週末になると、何度か入浴し、細心の注意を払って服を着、丘陵地への長時間の散歩に出かけた。このように用心に用心を重ねたが、これが却って徐々に心をリラックスさせてくれた。私は､みすぼらしくも、放心状態に陥り、気持ちが塞ぎ、孤独になっていった。じめじめした気候が私の精神的苦痛をさらに増大させた。私はいつも体が濡れているように感じ、いつも風邪をひいていた。時折、女性とも卑劣な性的関係をもったりしたが、グラスゴーから携えて来たすべての希望が一つ一つ萎えていった。ある夜、友人とクライド川の岸辺を散歩していたとき、自分では何を言っているのかほとんどわからずに、ただ自分の考えを言っただけなのだが､「もしここから脱出できないなら､いつか夜にこの川に飛び込むよ」と言った。友人は驚いて私の方に目を向けた。そしてほどなくしてグラスゴー近くの会社の職をみつけてくれた。彼には終生感謝あるのみである。

人生というのは、一事がうまく行かないと、万事がうまく行かないようだ。最初の数か月、私はそろいもそろって一風変わった女家主のところに下宿することになった。ここへ来る前、老Ｃ氏は工場の近くに部屋を用意してくれていた。その部屋は理髪師の家屋の中にあった。この理髪師は男やもめで、二人の娘が面倒をみていた。私が到着した晩､上の娘が宿泊する部屋へ案内してくれた。かなり大きな部屋で、二つのダブルベッド、いくつかのソファや椅子、それに洋服タンス、上部に鏡がついた洗面台、さらに使われていない大きなテーブルが真ん中に鎮座していた。部屋はとても大きかったので、このように雑多な家具が置かれていたにもかかわらず、何かがらんとしていて、わびしい感じがした。ベッドの一つを共同で使うことと、その部屋の他の三人の居住者は彼女の父親の理髪店の見習い理髪師であることをその娘は教えてくれた。ここには長くは居られないと心に決めた。

この家屋には他に二人の腕のいい理髪師がいた。一人はフットボールをやる息子で、もう一人は夏冬を問わず、毎朝クライド川に沐浴に行き、また見習い理髪師たちの頭をポンポンと叩かずにはいられない老齢の敬虔な男やもめであった。見習い理髪師たちは縮れ毛の伊達男で、毎晩遊歩道で一団となって、はすっぱな娘を追いかけ回し、自分の手柄を自慢しながら帰って来るのであった。彼らはほとんどいつもいっしょであったし、また干渉されまいと用心していた。彼らは何でも、衣服でもネクタイでも冗談までも共有していた。この三人とその部屋で寝起きしたが、私は農場に昔からいる牛の中に入ってきた新参の牛の立場とまったく同じであった。彼らは私に対して無礼ではなかったが、私のことは理解できなかった。彼らは孤立した状態の中で自分たちの楽しみのためにのみ演奏しているミュジックホールの一座のようだった。私は二週間このような風変わりな場所で寝泊りした。

次の下宿先は、小柄だが、身なりのこざっぱりした年配の未婚の女性のところであった。彼女とは私がここに来てから立ち去るまでほとんど顔を合わせなかった。彼女は私の行動を細心の注意を払ってみていたにちがいなかった。毎朝浴室から戻って来ると、朝食がテーブルの上にあった。まるで非人格的な力によって用意されたかのようだった。ランチも午後のハイティも同じように用意されていた。また会社で何かあって帰りが遅くなっても、食事はテーブルの上に石のように冷たくなっていた。女家主が姿を見せたのは唯一土曜日だけだった。食事代を集金に来るのである。まずドアを静かにノックする音が聞こえ、それからドアが開いた。彼女はドアの側にうつむいて、自分が下宿人を置いているといった風もなく、何も言わずにじっと立っていた。それで、私はお金を手渡しながら、驚いた声で「ああ、そうね。これでいいですか」と言った。このような慎重な態度は彼女の内気な性格によるのではなく、度を越した礼儀正しさによるものだった｡後で知ったのだが、彼女は教会の活動に参加しており、なかなかの評判であった。冬が近づくにつれ、彼女は石炭をけちるようになった。ある日の夕方、通路で技術者であるもう一人の下宿人に出会った。彼はいわくありげな身振りをして、私の部屋に入ってきた。彼もまた石炭の問題で悩んでおり、彼が働いている造船所から石炭や薪をコートに隠してくすねてくる癖が身についてしまったと言った。彼は気前よく私にその石炭を分けてくれた。それから、あ

る土曜日の午後、思いがけないことに、散歩から帰ってみると、白い顎髭を生やした立派な老人が部屋の赤々と燃えている暖炉の前に座っていた。それまでその老人に会ったことはなかった。女家主は急いで部屋に入ってきて、息を切らしながら、「父です」と言い、何やらぶつぶつ言っている老人を連れ出していった。私は椅子に座って暖炉を楽しんだが、その晩、ここを出て行くと女家主に伝えた。

しかし、三番目の下宿先もいいとは言えなかった。先見の目がなかったのだ。夕方暗くなってから、新たな下宿先を調べに行った。女家主は親切で、安らぎを与えてくれるような女性のようだった。土曜日の午後、荷物を持っていくと、部屋の窓が共同墓地に面しているのを知った。冷たい雨の中を霊柩車がその墓地に進入していくところであった。私を歓迎するために部屋の暖炉の火は燃えていたが、暖炉から煙が出ていた。女家主はため息をつきながら、部屋の中にそっと入ってきて、「ひどい日ね、本当にひどい」と言った。私は窓を開け、煙を出し、ここにも長くはいられないと心に決めた。しかし、私の抵抗心は今ではいささか弱まり、私には信じられなかったが、冬の間ずっとそこにいた。まもなく私は風邪を引き、寝ていなければならなかった。その間、女家主は私の回りでため息をついていた。ある日仕事へ出掛けていくと、街路は雪が溶けてぬかるんでいた。天候が暖かくなりつつあるように思われた。休養もし、また春の気配も感じられ、新たな下宿を捜すエネルギーが湧いてきた。

今度は隣町のファルドサイド(Faldside)で部屋を捜そうと心に決めていた。ここは海辺の避暑地であった。そして最初の試みはラッキーであった。若いスミス夫人、スミス夫人の母親で、品があって美しく、赤毛の男性的な女性、それにスミス夫人の二人の娘という、女性だけでうまく経営している陽気で明るい下宿屋を見つけたのである。大きくて高い建物群の最上部にある窓からは河口とハイランドの山々が一望できた。女性のおしゃべりに満ちたこの楽しい下宿屋は私の罪意識を払拭するのに役立つはずだったが、却ってその罪意識は私の心を苛み、私の夢を満たすことになった。眠りながら、私は沈滞と衰退のイメージに向かっていった。黒くて虫喰いの桟橋の夢をみたし、またちょっと触っただけでバラバラに壊れてしまいそうな船に飛び乗り、そして黒くてぬかるんだ泥水に落下してしまう夢もみた。しかし、最悪の夢はやたらと頭をくねらせているウジ虫が炉の中で溶けて、柔らかくて濃厚な黄色の塊になっていく夢であった。いつだったか、別世界からのように、母親の夢をみたこともあった。母親はおじぎをして私の前に立っていた。それゆえ、母親の薄い髪の毛の分け目を見ることができた。その髪の毛をみて、私は母親の勤勉と自己放棄と失望の人生を思い浮かべ、母親を両の手で抱きしめた。そして感極まって泣き出し、目を覚ました。

ファアポートを去って数年後、骨工場での生活を想像して書いてみた。私の心から毒を除去するために書いたのだが、この想像の産物が一つの物語にでもなればとも思ったのだ。しかし、そうはならなかった。再読したとたん、あの二年前の感情が鮮明に蘇ってきたのだ。その一部を引用してみる。「彼」というのは、もちろん、私自身であり、うまくいかなかったが、私の生活を客観的に見る工夫である。私は年一回の休暇に出かける自分を想像している。

> 机の中の書類をすべて片づけ、最後にそれを一瞥して蓋をし、鍵をかけた。午後の埃にまみれた陽光は窓ガラスに差し込み、オフィスは暖かく静まりかえっていた。外からは貨車が側線で次々とぶつかるときの明るいが、身震いするようながちゃんという音が聞こえてきた。積荷はまだ貨車から降ろされているところだったが、しばらくしてあたりは静寂を取り戻していった。そしてこの静寂を破るのは、肉片のついた骨を見下ろしながら旋回しているカモメの大きな鳴き声だけだった。カモメはふわふわした羊毛のように貨車を覆い、短いかん高い声をあげ、腐りかけている肉片を喧嘩しながらついばみ、それから舞い上がり、大きな輪をつくりながら離ればなれになり、空中で重々しく黒くなっていった。
>
> 彼は上着を着替え、外に出て、机の鍵を重量検査人に渡した。
>
> 「それじゃ、また二週間後に。清算はみんな済んだかい。」
>
> 「済んだよ。それじゃ、さよなら。」
>
> 彼は駅に向かい、急いで安アパートの間を下って行った。遊びながらぎゃあぎゃあ騒いでいる子供たちがアパートの入り口を塞いでいた。最上階の窓の外に吊るされた鳥かごの中のカナリアは喜びに満ちた声で鳴いていた。鬚をそり、マフラーを身につけた数人の元気のいい若者が歩道で憤然として彼を睨みつけた。彼はそこの道を通って行かなければならなかった。そっちの方の列車に乗るからだ。彼は坂を走り下って行った。陽光が照りつけている外から、暗くてがちゃんがちゃんと鳴り響いている駅舎に入った。列車は動き出していた。車両の扉を引っ張り、押し入った。ぎりぎり間に合った。
>
> 列車は押し殺したような警笛を鳴らしながら、

トンネルの中を走っていった。そしてより深く沈むように走っていった。エンジンは暗闇の中のはるか前方で動いていた。彼は眼を閉じた。二週間。休みが取れてうれしく思った。腐っている骨の山やグリースと煙にまみれた街路を洗い流してくれる少しのきれいな空気、海の眺め、そして丘陵地。

その町にきてからほぼ一年が経っていた。工場での最初の朝を彼は忘れなかった。町に一歩踏み入れたとたん臭ってきたやんわりとした、気分が悪くなるような悪臭の中心にいつの間にか初めて近づいていったときのように、彼の心は沈んでいた。その悪臭は宥めるように退廃を暗示していた。十日前、彼はこざっぱりした、清潔な、血色のよい老人と三十マイル離れた町の明るいオフィスで面談したのだが、その時、死んだ動物の骨のことは何も聞かされなかった。彼はただ週給二ポンドで簿記係として雇われたに過ぎなかった。

むかむかするような不快感をこらえようと努力した最初の日々を彼は忘れなかった。骨が溶炉の中で燃えたときに立ちのぼる悪臭には猥褻な臭いがし、濃厚で油っぽい煙はらせん状になって周囲に漂っていた。雷鳴轟く日は、臭いは空中にどっしりと停滞し、僅かに動いて、まるで汚れた翼のブラシでなでるように、頬をなでた。当時その臭いは衣服に浸透し、皮膚を被っていたので、容易に知覚できるように思えた。それゆえ、下宿に帰ってから、衣服を脱ぎ、奇麗になったと思うまで全身を洗った。臭いが常に自分に染みついていないかとか、皮膚に浸透し、廃退の雰囲気を漂わせながら自分につきまとっていないかとときどき思ったりした。骨の荷を降ろしたり、骨を熔炉の中に投げ込んだりしながら、骨工場で働いている人たちは、男も女もみな、どんなにこすっても、その臭いを消すことはできないという話を聞いたことがあった。臭いは女性の髪の毛や皮膚の穴に入り込んでいた。彼女たちは、夜町外れのサンザシの茂みの陰で束の間の性的忘却に身をまかせているときに、恋人の顔にその臭いを吹き込んだ。彼女たちは司祭が彼女たちの口にふくませたホスチアにも感染させ、しかもそのホスチアにマクリントックの骨工場の味を含ませながら、最後の息と共にその臭いを吐き出した。このように付着したらなかなか除去できない、不快な臭いに、はじめは言いようのない嫌悪を感じたが、次第に慣れ、今では慣れっこになってほとんど動じなくなった。

この悪臭は化学反応の外的な表象でしかなかったが、ひそかな堕落の感覚が彼に襲ってきたのは、この化学反応の詳細を彼がすべて把握してからだった。まず、骨は国中の勤勉な労働者によって、農場、裏通り、廃馬処理場、肉屋などから集められた。骨がまるで貴金属でもあるかのように収集され、貨車に積み込まれ、工場へと運ばれた。骨にも、牝牛、雄牛、豚、馬などの骨があり、スコットランドの肥沃な野原の若草で育った、世話の行き届いた羊の骨もあった。また時には、不運なことに、白くてひからびた人骨、腕や頭蓋骨などが見つかることもあった。動物の骨は、その脂はすえた臭いがしたが、常に水分が含まれていて、柔らかかった。そして内部の骨髄は腐敗しかけていた。黄色いウジ虫が大量にくっついている骨もあった。ウジ虫は、淀んではいるが、当てもなく絶えず巻き上がる波のようにお互いの上を這い上がりながら、ゆっくりとふくれ上がり一つの山となっていった。熱心な釣り人は工場に来て、ウジ虫を何缶ももっていった。貨車から骨が降ろされる前にカモメが骨についたウジ虫と肉片をむさぼり食べていた。貨車は、次から次へと、できるだけ早く工場へと入れられた。その後、何が起こるのか彼にはわからなかった。グリースが骨から抽出される過程があり、その後清潔で乾燥した骨は熔炉の中に入れられ、黒くなるまで、乾燥した黒い粉末に――つまり、炭に分解するまで燃やされた。この炭は砂糖を精製するために精錬所へ送られた。こうして、脂の小奇麗な鉄のドラム缶の中で、混じり気のない乾燥した粉の中で、清潔で無頓着な化学反応による分解の凄まじい工程が猛烈な勢いで終了するのであった。

化学反応は確かに無頓着だが、清潔という点になると話は別だった。最終的には乾燥した、消毒された残留物が残ったが、腐敗臭は人々が吸い込む空気に拡散し、至る所に漂い、しかもそれを撃退する手立てがなかった。つまり、その臭いから逃れる術がないのだ。町の人たちはだれもこの臭いを恥じた。その臭いを鼻でくんくん嗅ぎながら夕食のテーブルを囲んでいるときも恥じたし、客を供応しているときに窓から臭いが侵入して来ることも恥じた。

正午のベルが鳴り、工員たちは男も女も骨が散乱している中で腰を下ろし、昼食を摂った。彼らはどこかよそへ行けたのだろうが、どこへ行くにも悪臭がつきまとっていたであろう。彼らはどこへも行かず、そこに留まっていた。

列車は陽光を浴びて走っていた。彼は窓を開けて新鮮な空気を吸った。目の前には広々とした入り江が広がっていた。大型船が、対岸の連なる丘陵をまるで羊の毛を刈り込むように刈

り込みながら、また岸辺まで踊りながら辿りつく細波を幾重にも立てながら、川を遡上していった。大型船が通過した後、連なる丘陵は夕日を浴びていっそう静まり返り、河口の澄みきった水面も再び静けさを取り戻していった。カモメははるか沖に浮かぶブイに止っていた。それは空中に浮いた湾の白い斑点のようだった。

彼はそれをじっと見つめていた。欲望が悪質な貨車に縛りつけた、腐敗しかけている肉片を見下ろしながら鋭い声で鳴いていた自由きままな鳥のカモメ。分解の悪臭を発しながら、隠れ家がごみの山なのか、花畑なのかを露呈している死んだ動物の見捨てられた骨。がちゃがちゃと音を立てる脚、肋骨、頭蓋骨が積まれ、ウジ虫の黄色いケーブルを花綱状に飾った貨車。醜い城造りの塔が聳え、広大な庭やブドウやモモを栽培している温室を備えたマクリントック家の派手な屋敷。夕食時に、東風がその家に残していった悪臭の井戸の中に坐して夕食をとっているれっきとした家族。サンザシの茂みの陰で恋人と寝ているマクリントック家の娘たち、彼女たちの髪からプンと立ち上るひどい脂の臭い。そして、浄化できなかった火、消されなかった火が燃え始めたときに、中心で秘かに立ち上る悪臭。そして最後に、清潔で乾燥した炭の粉末。つまり、遺骸から粉末へ。そしてこの海の静かな腕、連なる丘陵、この清浄な空気。こういったものには一体どんなつながりがあったのだろうか。おそらく、化学の無頓着な側面でのつながりしかなかったであろう。そこでは悪臭と卑猥は偶然の組み合わせであり、また堕落も別な種類の意識の想像の産物に過ぎないのであった。彼の知性は化学の純粋な世界に向かっていたのだが、彼は自分の意識に深く閉じこもっていた。化学は彼を助けることはできなかった。

ここでこの素描はおかしくなり始めた。それゆえ、これ以上引用しない。これは自分がかなり悪い精神状態に陥っていたことをかなりはっきり示している。それでも私はニーチェを読み続けた。そして、私の超人のイメージの中に、巨体の裸の人種が遺骸の山の中を元気よく転げ回っている、人を不安にさせるイメージが入り込んできた。それは善悪をはるかに越えていたので、私の思考はそのイメージにもはやついて行けなかった。一方、清潔なものはすべて無防備で、まるで病人のように弱々しくみえた。日焼けした行楽客という荷物を乗せて入り江を航行していた遊覧船は危険にもいまにも壊れそうにみえたし、若い女性たちの夏の派手な衣服もほんの束の間のもののように思われ、不安に満たされた。だが、何についての不安なのかわからなかった。

グラスゴーを去る前は無数の友人がいたが、その友人たちが普通の人でないことを知らなかった。彼らの知力や感覚を当然のものと受けとめ、フェアポートでも彼らのような人を見つけようと思ったが、すぐに自分の誤りに気づいた。孤独な生活を数週間過ごした後、地方紙に投書して、ディスカッションクラブをつくってはどうかと提案した。この投書によって、ほんの僅かではあるが、通信がはじまり、二人の青年と接触するようになった。一人は眼鏡をかけた、生真面目な青年で、もう一人は夢見心地の感傷的な青年であった。二人ともフェアポートにディスカッションクラブをつくるという考えを嘲笑った。その後、通信は政治家たちの手に委ねられることになり、ファルドサイドのホールで会合が召集された。指定された夕刻に行ったが、そこには四、五十人の人たちが集まっていた。私はディスカッションクラブ設立の提案をしたが、大多数の人は議会での討論会に賛成であった。私は降参せざるを得なかった。そしてファルドサイド議会が設立された。すべての似たような団体同様、それは大人の「ごっこ遊び」であった。我々はお互いに「～先生」とか「～閣下」とか呼び合い、たいそううれしく思った。自由党が政府をつくったが、まもなく保守党に追い出された。私は小さな労働団体の副リーダーを務めた。我々は当時流行していた女性選挙権や失業保険の問題を議論した。そしてプロパガンダが我々の小さな団体がこれら一連の活動に参加する唯一の口実であったので、ある夕刻、私は社会の社会主義的救済法を概説する役に選ばれた。議論は現実的な問題だったので、成功した。一人ひとりがいつもよりよく発言した。その後、人々は日常の仕事に戻っていった。議会では、私の記憶では、とくに厄介な予算について、もううんざりと言わんばかりに、息を切らしながら長々と議論していた。

この討論会から得たものは唯一友情だけだった。社会主義に関して演説した後、自由党の国務長官のデーヴィッド・P が、彼は髪と瞳が黒いハンサムな青年だったが、私にお祝いの言葉を述べるために近づいてきた。我々は家までいっしょに歩いて行った。その後我々は長年、最初はファルドサイドで、その後はグラスゴーで、それからさらにロンドンで親友として付き合うことになった。デーヴィッドはグラスゴーの裕福な商人の息子で、義務感の強いとても敬虔な青年で、宗教的信仰のために様々な犠牲を払っていた。デーヴィッドはまた子どものときからひどい広場恐怖症に苦しんできた。彼の家族は当時得られる知識を基に、彼のためにできることはすべてやった。両親は我が

身を捨てて自分の面倒を本当によくみてくれたと彼は度々言っていた。両親は最良の福音派のキリスト教徒であったが、彼の精神状態を理解しておらず、訓練して治していかねばならないと考えていた。七歳のとき、聖霊に罪を犯したという考えに恐れおののいた。毎日の通学は彼にとっては拷問であった。広い空き地に来ると、息が詰まりそうに感じた。彼はこの強迫観念と戦ったが、無駄だった。

学校を終えると、デーヴィッドは大工仕事の見習いに行かされた。屋外での生活が必要だと考えられたのだ。彼の本当の関心は知的なこと、特に社会問題にあった。彼は不可知論者となり、社会主義者となった。彼のことが心配になった父親は、軍隊に入隊させる決意をした。デーヴィッドはエディンバラのピアズヒル兵舎に入った。そして十八歳の誕生日に第十七槍騎兵隊に入隊した。その隊を選んだのは、隊の帽子にどくろしるしがついていたためだった。一年も経たないうちに、彼はエディンバラ・カースルの陸軍病院へ送られ、心臓弁膜症と神経衰弱症で退役させられた。

一年間家にいた後、彼はカナダに行った。そこで『悔恨』（*Remorse*）（英国のロマン派詩人、批評家S.T.コウリッジ 一七七二―一八三四 の詩劇＝訳者註）という芝居の役者をやったり、オンタリオ湖で船員になったり、十セントレストランのウエーターになったり、さらに筆跡観相家の仕事などをしていた。往年の病気がぶり返し、自尊心のゆえに家に手紙を書かず、また仕事に就くこともできず、まもなく、餓死しそうになった。とうとう路上で倒れ、病院に運ばれた。取り調べを受け、健康を害した廃人同様の人として本国に送還された。カナダで彼を助けてくれたのは、唯一、トロントの聖ジョーゼフ女子修道院の修道女たちであった。後年、ロンドンでジャーナリストとして成功したとき、彼は女子修道院長に手紙を書き、彼女の親切に対し感謝した。その手紙は貧しい人々に慈悲を施すようにとの修道女たちへの激励としてピンで留められ、掲示された。

カナダから帰って来た後、長年彼は病気のときとそうでないときの境界をさまよっていた。あるとき、病気がひどくなったとき、まるで一つの声が語りかけたかのように、「お前には誰もできない仕事がある。お前は戦争廃絶のために力をかさなければならない」という考えが浮かんだ。彼はその後ずっとこの決意を忠実に守り、平和のために働き、仲裁連盟を設立した。これらの活動は何人かの名のある人たちに支持された。

私がデーヴィッドに出会った当時、彼はフェアポートの地方紙で働いていた。彼は背が高く、体ががっしりしており、ハンサムで立派な身なりをしていた。そして出会ったすべての人に関心をもった。彼の病気の唯一のしるしは、頭を少しぴくぴく動かすことだった。この動作は、小さな欠陥が度々そうであるように、彼のハンサムな顔に一つの特徴を、ちょっとした不思議な魅力を与えた。彼はこれまでの知人の中で一番勇気があり、親切で、誠実な人たちの一人であったが、障害があったために、（彼はこの障害を恥ずかしく思い、隠していた）彼はごまかしや言い訳のないシステムを作り上げ、そして役者になった。トリックを演出するよう求められたとき、役者のトリックはときに彼自身を欺くこともあった。後になって、彼は、自虐的にではあるが、楽しくそのトリックのことを笑い飛ばしていた。彼はハンサムで、感じがよかったので、女性たちを引きつけた。そして、彼女たちが彼に惹かれていることを示すと、役者である第二のデーヴィッドは力量を発揮せずにはいられなかった。彼は「またバカなことをしてしまったよ」と言いながら、私を訪ねてきた。こうした出来事は害のないものだったが、とうとう彼は喫煙車両に乗ってフェアポートへ通うと誓った。当時、女性がそのような車両に入るとは考えもしなかったからだ。